

神戸昇天教会月報

〒652-0015 神戸市兵庫区下祇園町39番7号 神戸昇天教会

牧師 小南 晃 電話 (078) 361-4490

FAX (078) 361-4539

http://nssk-kobeshoten.org/ 振替口座 01110-2-10517

今年の標語

「来てみませんか？」と誘える教会を目指そう。

努力目標

- ◎主日礼拝を大切に守ろう。
- ◎他教会の働きを知ろう。
- ◎教会ホームページの充実と活用。
- ◎地域との交流促進。

聖語 御言葉を宣べ伝えなさい。折りが良くても悪くても励みなさい。(Ⅱテモテ 4:2)

教会記念日説教 (抜粋)

わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。

(ヨハネ15章12節)

主教 アンデレ 中村 豊



本日は「ロゲーションサンデー」といい、明日から3日間は昇天前祈禱日、英語で「ロゲーション・デイ」と呼びます。ロゲーションとはラテン語の「祈り・願い」という意味です。

4世紀初頭、キリスト教がローマ帝国公認の宗教となり、帝国の人たちは我先にキリスト教に改宗しましたが、百年後、火山噴火が起こり、ウィーン地方は甚大な被害を受けました。ところがキリスト者は自分の保全を図ることに汲々とし、混乱に拍車がかかったのです。

これを憂いたウィーンのマメルタス主教が、昇天前主日から昇天日

前日までの4日間、この世界と人々のために祈ることを教区民に命じたのが起源です。

このように私たちキリスト者は、自分の為だけではなく、他者やこの世界のためにも祈りを欠かしてはいけないということです。

そして、その姿勢は毎日曜日の聖餐式における代禱がそれを明らかにしているのです。

何よりもまず愛を

ところで、神さまは私たち人間に対して、神に祈ることを求めているかどうかについて考えてみたいと思うのですが、それが顕著に現されているのが、ルカ福音書の18章のエルサレム神殿でファリサイ人と徴税人が祈っているその内容です。

ファリサイ派の人たちは、常に道徳的な姿勢を問題視しているようです。見方を変えますと、当時のユダヤ人社会の中で、善良で、

はっきりした思想の持ち主、しかも社会的にみて立派な人たちであったということです。今日の社会で言えば、オピニオン・リーダーとして、人の生き様を解説するだけではなく、それを身をもって実行しようとした人々たちです。ファリサイ人は神に、収入の十分の一を献金し、週に二度断食し、人から物を奪い取ったり、不正をしたこともない自分を褒めてください。あの徴税人のような者でないことを感謝しますと言うのです。

一方の徴税人とは、ファリサイ人とは全く正反対のところにいる人々たちです。言わば社会と人間の悪と恥の代表的な存在であり、ローマ帝国に身も心も売ってしまった人であり、しかも、人々の僅かな財産までかすめ取りますから、人々の憎しみの対象でもあったわけです。その徴税人が神殿の後ろの方で、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら「神様、罪人の私を憐れんでください」と祈っている。

私たち人間の見方からしますと、ファリサイ人は模範的で非の打ち所のないキリスト者です。

定例集会

日 午前7時 早朝聖餐式
 " 9時15分 教会学校
 " 10時30分 聖餐式・説教
 午後6時 夕の礼拝

火 午前10時30分 聖書研究会
 土 午前10時30分 教会掃除
 (ご奉仕をお願いします)



日曜日欠かさず礼拝に出席し、10分の1という多額の献金を献げてくださり、断食も忘れない。ところが、イエスの目からしますと、徴税人の祈りが褒められたのです。

一つの見方では、神さまは自分に対して祈る人を求めてはいないということなのです。そうではなく、自分を愛する人を求めておられる。キリスト者は「清い心と正しい良心と純真な信仰とから生じる愛を目指すもの。(Iテモテ1:5)」なのです。

私たちは神を愛さないならば、誠をもって互いに愛することができないのです。神を愛するならば、人は各々の隣人を自分のように愛するのです。

人は何故怒るのか

では、ファリサイ人は徴税人をどうして愛することができないのでしょうか。

スマラサーナというスリランカの仏教のお坊さんが「怒らないこと」という本を出しておりますが、その中で、仏教的に怒りという感情のプロセスを次のように分析しております。

目を開けますときれいなバラの花が1本見えます。そこに「花だ。きれいだ」という楽しい感情が生

まれます。これは愛情の感情です。そして目を閉じて、また目を開けた途端、花の上に大きなゴキブリがいるのが見えたのです。その瞬間、「嫌だ、気持ち悪い」という感情が生まれます。これを怒りの感情といいま

す。この場合、「嫌だ」と思うその感情を誰のせいにしてしようとするのが問題なのです。

「怒りが生まれたのはゴキブリのせいなのだから、悪いのはゴキブリ」というふうに決めるのか、あるいは、「犯人は自分自身だ」と決めるのか、この何れかなのです。



最初は美しい花を受け入れました。しかし、ゴキブリが目に入った途端、見たくない、嫌だ、いてほしくない、出て行け、と拒絶します。では、この受け入れることと拒絶することは一体だれが行っているかなのです。それは、私たち自身です。花を容認すれば愛情が生まれ、ゴキブリを拒絶すれば、怒りの感情が芽生えるのです。ですから、怒るか否かは個人の人格の問題となるのです。

一方、バラの花は、ただ自分の習性で咲いているだけで、バラ自体は「わたしは綺麗でしょう。どうぞじっくりと見てください。」と

他人に頼んではいません。人間が何を言おうが、バラの花には何の関係もありません。それを「きれいだ」というのは人間の勝手です。同じように、ゴキブリを「気持ち悪い」というのも人間の勝手です。そもそもゴキブリは、そんなに醜くくて、ひどい生き物なのでしょうが。

鶏は結構ゴキブリを食べるそうです。その鶏がゴキブリを見たら、「これは美味しそうだ。食べてやろう」と思って、そこに受容という現象が生まれるのです。ゴキブリを見た私たちは拒絶の感情を持ちますが、鶏は「食べると美味しいじゃないか」という感情が生まれます。

問題としなければならないことは、怒りの人生に喜びはないということです。怒りが生まれると喜びが一挙に失われてしまうからです。そこで、怒りを生まれないように、怒りと戦おうとする感情も、また「怒り」なのです。そうではなくて、怒らないような人格に育てようということになります。

誰にでも、あの人は嫌いだ、あの人は苦手だ、馬が合わないと感じ



じる人がいます。しかしそれはほとんどの場合、花が嫌いではなく、ゴキブリのことを言っており、ゴキブリイコール花になって、その人の存在自体を無視しようとしているかもしれないのです。

ある人が言いますように怒りというのは、愛の裏返しであり、また、愛は怒りの裏返しなのです。従って、愛の対極は怒りではありませんし、憎しみでもありません。

愛の反対は無関心、冷淡な目で相手を見ることなのです。学校で、職場で、地域社会でこのようなかたちで無視される、これほど恐いことはありません。そこには、その人に対する愛のかけらもないからです。

砕けた魂とは

詩編51編はラテン語でミゼレーレ、憐れみの詩編と呼ばれます。ダビデ王がバテシバという女性と不倫して、バテシバは妊娠してしまいます。そこで一計を案じたダビデは、その夫である、30勇士の一人と言われた、バテシバの夫ウリヤを前線から引き戻し、よく戦っているから家に帰って休みなさいという、労いの言葉をかけ、夕食に招待するのです。夜となりましたが、ウリヤは自分の家には帰らないのです。自分の部下が戦場で戦っているのに自分だけはい

ダビデの家臣と共に眠ったのです。そこでダビデは將軍ヨアブに手紙を出し、ウリヤをもっとも激戦地域に送り出すように命令します。結局ウリヤは戦死し、バテシバを自分の妻にしてしまうのです。

しかし、ダビデは自分がとんでもない罪を犯していることに全く気付かないでいたのです。ダビデ王は苦勞に苦勞を重ねて、多くの辛酸をなめて王に即位しました。



しかし王になった途端、全ての権力を握り、慢心していたのです。

そこに登場したのが予言者ナタンという人です。彼はダビデに向かって、過ちを悟らせたのです。予言者ナタンは、彼の信仰の指導者ではありましたが、彼の家来の一人にすぎません。怒って、ナタンを追放することもできたのですが、ダビデは、率直に罪を認めたのです。人間にとってどんなにつらくて受け入れがたいものであるか、私たちの心に聞いてみればすぐ分ることなのです。

詩編51編のなかに「神はいけにえ望まれず、燔祭を献げても喜ばれない。ただ砕けた魂を喜ばれ

る」という祈りがあります。砕けた魂とは、神に帰った魂です。神によって創造された私たちは神に対する責任がある、それを全うできないとき、心から悔い改めなければならないのです。

謙遜から生まれる愛

サムエル記下16:5以下にダビデが、その後、ある所に行ったとき、前の王様サウル王の一族で

あるシムイという男が出てきてダビデを散々罵倒し石を投げ始めました。

ダビデの家来たちは憤慨しますが、ダビデは何も言わずに、これは神が私を呪えと言っているのだ、といて自

分を低くしたのです。

ダビデが真に謙遜になったのは、シムイから罵られたからなのではなく、実に、ウリヤとの不倫を予言者ナタンから叱責された時なのです。このような謙遜で率直な姿勢を神さまは私たちに望んで居られるのです。

イエスが苦しみを甘んじて受けられ、人々から罵られても、誇られても、それを黙々と忍ばれたように、それを模範として、自分の弱さ、醜さを自覚し、謙遜な心で他者と接すること、これがイエスが望む、互いに愛し合うことの意味であることを、本日の福音書から学びたいものです。